

同情ではなく共感を、そして協力を。

神奈川県 横浜市立南高等学校附属中学校 3年

霧生 帆南 (きりう はんな)

障がいのある方にとっての障壁は、歩道の階段等の物理的なものにはもちろん、情報の行き交いや意思の疎通におけるものにも存在しています。その中で私は、視覚障がいのある方々にとっての障壁のことを考えました。

私は本が好きで、学校で図書委員を務めています。また、図書館にもよく足を運びます。活字を見ることで気持ちが落ち着き、読んだ内容に感動することもあるからです。また、本の感想を他者と交換することもあります。「読書」について考えると、視覚障がいのある方々にとって、点字は活字のような役割を果たします。しかし、点字を読めない視覚障がい者の方にとっては、目が不自由なことで、本から得られる情報や情動を共有しにくい障壁があります。それをどうにかして取り払いたいと、私は考えました。

私は、小学生の時に国語の授業で点字を学びました。たった六点で一文字を表現し、視覚障がいのある方にも情報を伝達できる点字に感動しました。当初は点字を覚え、日常で出会うそれらを読めるようになりたい、という一心でした。けれどその後も興味は深まっていき、小学五年生の時には点字盤を買ってもらい、夏休みの自由課題として本を点訳することにしました。その時、点訳の仕方を参考にするために、横須賀市点字図書館へ行きました。

この図書館を利用する人の多くは、視覚障がいのある方や点訳ボランティアの方です。私は図書館の運営スタッフの方に点訳された本を見せてもらいました。この図書館に来たわけをお話しすると、視覚障がいのある女性スタッフの方を紹介してくださいました。その方は点字そのものについて、また、点訳をする際の注意点について教えてくださいました。日常的に点字を読んでいるからこそ分かる、点字を読みやすくする工夫等の配慮は、彼女に出会えたからこそ、私にも気付けたことでした。点字についての話の後、私の通う小学校や好きな本についても話したり、彼女に質問をしたりしました。当時小学生だった私にとって、普段全く違う環境で生活している、年齢の離れた方と話す機会はあまりありませんでした。そのため、この経験は、大変貴重なものになりました。そして、その時抱いた私の感覚は、障がいのある方と話した、というものではなく、人生の先輩から色々なことを教えていただいた、というものだったのです。

彼女は目が見えない分、耳からの情報を頼りにしていて、目が見えなくなっただけから、それ以前よりも聴力が発達したと話していました。普段聞いているラジオは、日常会話の二～三倍の速さだそうで、私も実際に聞かせていただきましたが、

全く聞きとれませんでした。障がいがあることで、そうでない人と同じようにはできないことがあっても、障がいのない人にできないことを、障がいのある人ができることもあるのです。

私はこのように、視覚障がいのある方と関わるまでは、障がいのある方に対して「大変なのだろうな」と同情する気持ちを抱いていました。しかし「同情」は「違い」を基盤に相手を思いやることで、「共感」は「同じ」すなわち共通しているところを見つけて向き合うことです。私はこの経験から後者の大切さを学びました。

障がいの有無にかかわらず、人にはそれぞれの悩みがあります。「同情」は障がいの「ない」人から「ある」方への一方通行の感情になることがあります。 「共感」は互いを思いやり、双方向に生まれ得る気持ちだと思います。「共感」から発する「協力」で、障がいの有無を越えて、障壁を取り払うことはできないでしょうか。もちろん今の世の中は、障がいのある方が支えられる場面が多いかもしれませんが、私の知り合った視覚障がいのある方の元へは、私には捉えられなかった光や音が届いていました。高質かつ迅速なテープ起こしをもその一つだと後に私は知りました。彼らだからこそできることで、私たちも支えてもらおう。「助ける・助けられる」関係性を固定化しない。助けが必要な面を互いに理解し合い、助け合える間柄でいられること、それを私は目指したいと思います。

同情ではなく共感を、そして協力を。同じ心に根ざして行われるならばそうありたい。私は社会の一員として、協力の土台となる「橋渡し」のできる存在になりたいと考えています。これからも点字を学んで、点訳を積極的にして、点字を読めない方には、点字の特徴や素晴らしさを届けながら、字だけで表現しきれない感覚的な素晴らしさも共有できるようにしていきたいです。一方通行ではなく双方向に。誰とでも協力し合える社会を築き上げられることを信じて。

